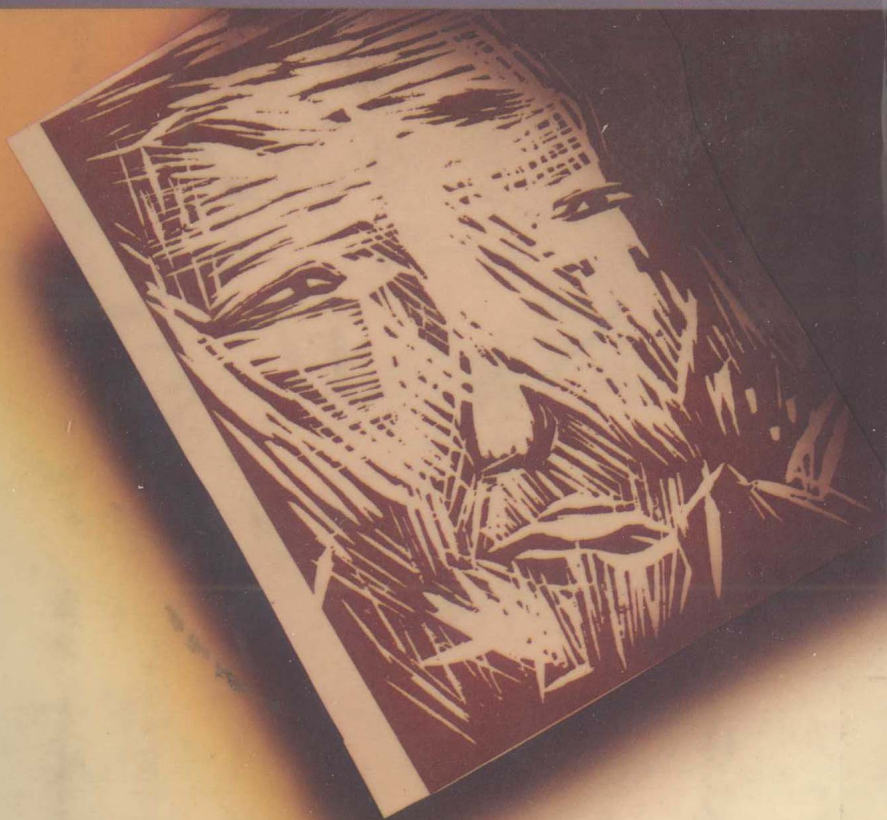


● 推理小説特別書下し



陳 舜 臣

闇の金魚



●推理小説特別書下し

陳 舜 臣

闇の金魚

講談社

闇の金魚

第1刷発行 一九七七年五月二十日

著 者 陳舜臣

発行者 野間省一

発行者 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

〒一一二 振替 東京八―三九三〇

電話 東京 (〇三) 九四五―一一二 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社上島製本所

©陳舜臣 一九七七年 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。



第 第 第 第 第 第 第
八 七 六 五 四 三 二 一
章 章 章 章 章 章 章 目
次

246 215 186 158 127 80 43 9

闇の金魚

めまぐるしい。これでは、あまりにもめまぐるしすぎるではないか。――
童承庭はそう思った。自分の人生、とくにここ十数年来のことについてである。

いま彼は一枚の黄色い紙片を手にして、そこに書かれている文字をみつめている。どこにもある中国ふうの便箋を半分に切ったものらしい。

紙片はかすかに揺れていた。彼は指さきに力をこめて、その顫えをとめようとしたが、かえって大きく揺れた。

「まちがいありませんね？」

前に坐っている男が、鼻にかかった声でそう念を押した。

童承庭はうなずいた。

答えなかつたのは、もし口をひらけば、相手の鼻声よりも、もっとひどい声になるだろうと思つたからだ。

「では、どんなことでもしてあげるつもりですね？」

相手は再び念を押した。

彼はまたうなずいた。目は紙片の文字に釘づけされたままである。

四個の文字が三列にならんでいた。

不幸被俘

酷刑審訊

堅貞不屈

（不幸にしてとらわれの身となった。拷問を受けても、けっして屈しない）

決意を披瀝した文章である。どこにも救いをもとめる言葉はない。

彼は目がしらが熱くなった。

齒をくいしばっている彼女の表情が胸にうかんだのである。彼女はよく齒をくいしばった。なんでもないときでも、そんな表情をみせたものだ。たとえば、走って行ったのに、停留所からバスが出たあとだったといったときにも。——そんななじみの深い表情であるだけに、彼は自分の胸を深く刺しつらぬかれるような思いがした。

拷問の辛さは、バスに乗り遅れた口惜しさなど、くらべものにならない。

「彼女を痛めつけるつもりはありません。それどころか、いままでは大切なお客様として取り扱ってきました。指一本触れちゃおりませんぞ。……むろん、いつまでもというわけじゃないのです。おわかりでしょう、あなたの返事次第ということになります」

鼻に抜ける声が、ますますひどくなった。そのため、この男の言葉はふわふわと空を漂っているようなかんじである。軽いリズムに乗っている。だが、彼の言っていることは、けっして軽いものではない。

これほど重い意味をもった言葉を、童承庭はこれまでに聞いたことはない。その重さは、彼

を深淵にひきずり込むようであった。

彼はまだ三行の文字から目を離さない。空を漂う言葉の重さには、そうしなければ耐えられそうもなかった。

「筆跡に疑問がありますか？」

彼があまり長く紙片をみつめるので、相手はもういちど訊いた。

「没有」——ありません。

やっと彼は口をひらいた。どんな声になったか、自分でたしかめる余裕はない。

彼女の筆跡を、彼が見誤るはずはなかったのである。

（他人が真似た筆跡であってほしい）

と祈りながら、なんどもみつめた文字だった。あまり濃くない鉛筆で、走り書かれたその文字に、どこか疑問の線や点があれば、彼はそれにすがりついたであろう。溺れる人が藁でもつかむように。——だが、十二個の文字には、藁ほどの疑いもなかった。

「では、用件にとりかかりましょう。まわりくどいことは申しませんよ。簡潔に言ったほうが、おたがいにおたがいに助かりますからね。もうこの際、飾り立てたり、遠慮したりすることはやめましょう。註釈もできるだけ短くします。……いいですね、聞き落とさないでください。……そう、こちらを見て……そう、私の目をみながら聞いていただきましょう」

相手の男は、催眠術をかけるような口調で言った。

童承庭の目は、やっと黄色い紙から離れた。

言われたとおり、相手の目をみた。

細い目であった。もともと細い目を、一そう細めているようなかんじである。目と眉のあいだがひろく、眉と眉のあいだもひろい。

この男の顔の造作が、いまにもばらばらにとび散りそうな気がした。

童承庭は大きなまばたきをした。

とつぜん、相手の顔がひきしまってきた。その目は彼を吸い込むようであった。

（それにしても、めまぐるしすぎる。……）

相手の目に吸い込まれまいとして、童承庭はそんな感慨を、呪文のようにくり返した。

第一章

1

十数年前、童承庭は十五歳の少年だった。はやくから両親を失ったので、叔父の家にひきとられたが、そこも貧乏な農家で、粗衣粗食に明け暮れた。ただ隣家が『書房』——すなわち寺子屋だったので、読み書きだけは習うことができた。

——ほう、この子は出来る。

書房の先生の陳老人は、唸るようにほめた。

たしかに、ほかの子よりは、読み書きの進歩は速かった。だが、唸るほどのことはない。

——童承庭は子供ながらも、先生はほめすぎであるとかんじた。だから、いくらほめられても天狗になることはなかった。

陳先生のほめ方が大袈裟すぎたので、彼の叔父も考え込んだ。

「この子は、ふつうの百姓にしちやいけねえのかもしれないねえだ」
と、先生のところへ相談に行った。

「そうだ、そうだ、百姓にするには惜しい。もつと勉強をさせなさい」

陳先生がそう答えたのはいうまでもない。

「どうすりゃいいだ？」

「寧波^{ニンポ}の学堂に入れてみな」

童承庭の故郷は、中国の浙江省^{せつしやう}であつた。そのあたりで一ばん大きな町は寧波である。清朝がまさに倒れようとする直前で、新式の学校が各地につくられていた。彼は寧波の学堂に二年間学んだ。成績はつねにトップであつた。

「寧波でも惜しい。こんな子は上海^{しゃんはい}へ送つて学問させるべきだ。将来、きっと郷党の誇りとなる人物になるじゃろ」

陳先生はスポンサー気取りで、童承庭に学問を続けさせることが、親族の義務であるような口ぶりだつた。

「そんなもんな。……」

叔父は腕組みをして、首をかしげた。

農家は一人でも多くの働き手がほしい。もう十五になったのだから、りっぱな労働力といえる。もしこれが自分の子なら、どんなに学問ができて、

——百姓の子は百姓じゃ。

と、野良へ追いやるであらう。

（兄貴の子じゃからなあ。……）

預かりものだから、自分の勝手にできないような気がする。

「そんなもんじゃよ」

陳先生にそう言われて、叔父はおずおずと、

「じゃけんど、上海なんて、とてもそんなゼニはねえし……」

「なあに、学問をさせる気さえあれば、なんとかなる。世の中には、唸るほどゼニをもつていて、それでもつて英才を育てるのをたのしみしている君子くんしもいる」

「赤の他人に？」

「同郷人じゃよ。……たとえば、この近郊から上海に出て、成功している永源昌えいげんしょうのごときは有望であろう。……うん、永源昌に話をかけてみよう」

陳先生は膝をたたいた。

『永源昌』というのは商号である。上海でも五指に入る大貿易商で、あるじの谷瑞書くわくざいしよは寧波府の慈谿じけい県の出身だった。童承庭の一族も慈谿の住人だから、たしかに同郷人である。

「ひえーっ、永源昌に……」

叔父は悲鳴に近い声をあげた。

水呑み百姓の彼にとっては、同郷人とはいえ、永源昌の谷家は雲の上の人たちというかんじなのだ。

「驚くことはない。一人の少年の学費ぐらい、永源昌にとってみれば、なんでもないことじゃ。

……うん、わしは永源昌を知っておるから、ま、まかしておけ」

あとでわかったことだが、このころ陳先生が知っていたのは、永源昌の番頭にすぎなかった。童承庭の上海遊学の交渉に出かけたとき、先生ははじめて谷瑞書に会ったのだ。

話はかんたんにきまった。

十五歳の少年を一人ひきとることなど、たしかに永源昌にとっては、なんでもないことだった。あまりにも軽すぎることなので、ひきとってしばらくすると、その存在を忘れてしまうほどだった。じっさいに、おなじようにしてひきとった書生の大部分は、あるじからその名前を忘れられている。いや、あるじは、はじめから名前などおぼえようとしなかったであろう。

だが、童承庭は名前をおぼえてもらえた。

フランス教会系の徐滙公学に入った彼は、その年、クラスのトップになった。番頭からそのことをきいた、谷瑞書は、

「童承庭か。……その少年は使えるかもしれんな」

と呟いたのである。

童承庭が上海に出た年、大きな変革があった。

さしもの清王朝が倒れたのである。

中華民国となった。

田舎から国際都市の上海に出て、目をまるくしていると、自分の国の政体まで変わってしまったのである。

この十五歳のときから、めまぐるしさが始まったのだ。

翌年の正月の末、童承庭はあるじに呼ばれた。

上海に出て一年近くになるが、最初のお目見得の挨拶のとき、

——がんばるんだよ。

と言われて以来、彼はあるじに声をかけてもらったことはない。

書生として邸に住み込んでいるが、彼とおなじ書生は十数人もいる。そのうえ、邸がひろすぎたので、あるじを遠くに見かけることはあっても、人間的接触といえるほどそば近くに寄ったことはなかった。

谷瑞書の邸の庭には、二つのあずまやがあった。東がわのが東竜亭、西がわのが西鳳亭と名づけられている。童承庭は西鳳亭へ行くようにいわれた。

あずまやだから壁はないが、屋根はそりあがった、仰々しい形で、四本の柱は大理石でつくられていた。東竜亭のほうは黒い大理石だが、この西鳳亭は白大理石に統一している。

陶墩（陶器の背のない椅子）が亭内に置かれていた。

——西鳳亭でご主人がお会いになる。

執事がおごそかな口調で言ったので、童承庭はなおのこと緊張した。

西鳳亭には、あるじのほか、色の青黒い、顔のながい人物がいた。顎がややつき出ていて、いかつい顔をよけい不気味にみせていた。目は薄くあぶらでも浮かんでいるように、ギラギラと湿りのある光り方をしている。

めったに会えないあるじの谷瑞書のまえて、童承庭がからだを縮めるように緊張していたのは、とうぜんであろう。だが、顔のながいその人物を見ると、彼は緊張を越えて、恐怖をおぼ

えたのである。

なにがおそろしいのかは、わからない。その人物ぜんたいの雰囲気がおそろしい、というほかはないだろう。心の底が冷えびえとするほど、彼はその人物に畏怖感を抱いたのだった。

後年、彼は歴史書のさしえて、明の太祖朱元璋の肖像をみたが、そのときとつさに、この西鳳亭の人物を連想した。容貌もすこし似たところがあつたが、その面相がかもし出す雰囲気は、もっと似ているように思えた。

あるじの谷瑞書は、その人物を紹介しなかった。少年書生は、そのあたりにころがつている石ころのような存在で、谷瑞書は紹介するほうが客にたいして失礼だと思つていたのである。

あるじは二たこと三こと、童承庭に質問した。それは、

——学堂は氣に入っているか？

——フランス語の授業は週に何時間だね？

といった、なんでもないことだった。わざわざ呼び出して訊くほどの問題とは思えなかつた。

童承庭は膝がガクガクふるえた。上海の冬はずいぶん寒い。だが、彼がふるえたのは、寒さのせいだけではない。

あるじの隣りにいる、長い顔の人物の、刺すような視線をかんじたからである。その人物は、綿入れの長衫（長い上衣）を着て、両手を拱手（こしゅ）の恰好にして、袖にさし入れていた。童承庭は失礼にあたつてはいけないと思ひ、なるべくその人物のほうを見ないことにした。それで